

教師の学び合うコミュニティをつくる協働研究の体制：部会研究による教師の成長を振り返る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 向当, 誠隆 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5433

教師の学び合うコミュニティをつくる協働研究の体制

－部会研究による教師の成長を振り返る－

向当 誠隆

序

われわれ教員は、3月末に前任校を離れ4月1日から次の赴任校の一員としての生活が始まる。新しい学校への異動は、いつも新採用の頃と同じような気持ちで迎えるものである。しかしながら、附中への異動となれば少し違う。周囲の先生から、「附属ってたいへんやね」「研究するんか？すごい」「鍛えてもらってこいよ」等々、慰労、驚嘆、叱咤激励の混じったいろいろな言葉が掛けられる。もちろんこうした言葉が、自分を勇気づけてくれるというもう1つの面を持っていることはいうまでもない。だが、逆に不安も一層強くする。それだけ、附中というところがほかと違うのであろうということが、周囲も本人もわかってはいるのだが…。こうした異動を終え、新しい年度の研究が始まる。

1. 教師の同僚性を培う研究

研究はトップダウンではなく、ミドルアップダウンとして行われることが望ましい。研究が一部の教師によってのみ進められるのでは、学校全体に広がっていくことはできない。ましてや、中学校は“教科のカベ”があるとよくいわれる。教科の論理・方法が優先され、ほかの教科の先生が普段の授業を気軽に参観したり、授業に対して助言したりすることがほとんど見られないのが、中学校の現状である。

こうした“教科のカベ”をなくし、研究が一部ではなく全体で推進されていくために、「研究企画会」と「部会」という小回りの利く研究組織が存在し機能している。

研究の方向性をコーディネートする研究企画会

研究企画会とよばれる組織は、研究主任、教科総括担当、総合総括担当など5～6名で構成される。教科や経験年数、担当学年などの重複についての規定はなく、メンバー構成

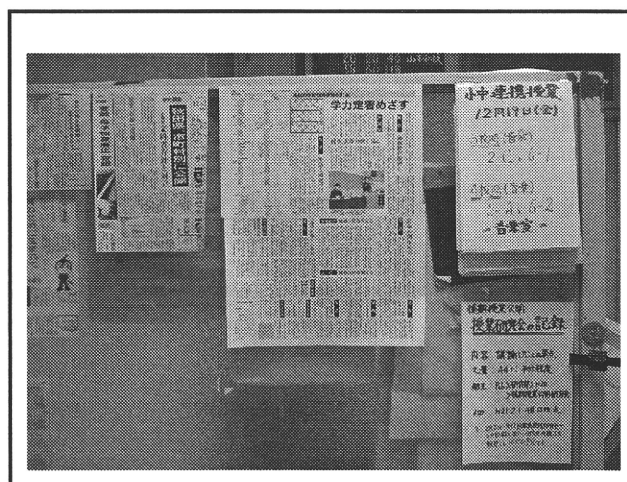
は研究主任の意向が重要視される。

研究企画会は、毎週1時間、時間割上に位置付けられており、その研究企画会には大学の先生方も参画していただいている。

研究企画会の年度初めの大きな活動は、毎年6月に開催される教育研究集会の全体研究会に関わる内容検討である。春季休業中に福井大学の実践研究の先生方と研究企画による合同研究会をおこなった。研究主任から教育研究集会で提案したい内容、その提案に対する大学の先生方からのアドバイスが報告される。教育研究集会の全体研究会は、本校の実践研究の意義と関連づけた提案をしたいという研究主任の思いを受けて、本校の研究の意義を改めて見直す機会となる。研究企画の話し合いの内容については、必要に応じて要約し、教育実践研究会で研究主任から報告される。

研究企画会では、毎月2回行っている教育実践研究会の内容、次年度のサブテーマなどの検討も行う。ほかにも、部会で話し合われた全体研究会に関わる内容についての報告を受けたり、新しい研究の方向性について意見を交換する場になっている。平成18年度からは、教育研究集会の司会者協力者と大学関係の指導助言者を対象に、教科ごとの授業公開と授業研究会を行うことも決定された。この授業公開・授業研究会を開催する目的や意義を明確にし、内に開く校内の授業公開を充実することを忘れてはいけないなどの確認も行われている。

研究企画は、各部会にそれぞれ1～2名所属し、部会を運営していく責任者となる。したがって、研究企画会で決定したことを伝達する役割も果たすことになる。しかし、その決定内容を伝えるだけではなく、その事項について意見を集約する役目も果たすことになる。



研究部の掲示板

研究企画が研究をコーディネートしていくことで、ミドルアップダウンの同僚性を持つ研究が継続されている。

同僚性によって支えられる部会

本校の部会は、A・B・C・Dの4部会で構成される。研究企画のメンバーがそれぞれの部会の所属するほか、国社数理英の五教科と音美体技家保の六教科の二つの群から均等になるように配慮されるが、学年や教職経験年数などには関係なく構成メンバー4名が決定される。

部会は、一年間に一度、全体に対しての提案授業と授業研究会を企画・運営する。授業者の決定や授業記録の方法、授業研究会の運営については、部会の中で話し合われる。授

業記録は、提案授業である教科の特性や協働探究の形態に合わせた方法になっている。参観者は、共有されるコンピューターの中にある授業記録に、参観した事実とそこから読み取った授業や単元の意義を参観者独自の視点で打ち込む。その授業記録をもとに授業研究会が行われる。授業研究会は、子どもの筋で授業を参観することを根底において、子どもの事実から授業を語るという参観者としての力量が問われる研究会となっている。

教育実践研究会では、なかなか発言できない場合が多いが、4名で構成される部会は自分の思いを率直に語れる場でもある。トップダウンではなくミドルアップダウンの同僚性を重視していることが、部会においても顕著に表れている。

参観者にとって、「子どもの筋で授業を参観する」「事実をもとに授業を語る」ということが、そんなに簡単なことではないこと、研究会を終えて悩んでいることがこの会話から読みとれる。一方で、授業者がこうした研究会の持ち方によって、3年間のロングスパンという視点に気づいたり、事実に基づいた授業の分析などによって授業意欲を持つことができたと述べている。授業を提案する先生が「まな板の鯉」にならないように、そして、授業者に感謝する研究会になるようにすることが、授業研究会の本当の目的であると考えている。

こうした提案授業のほかに、部会では気軽に授業公開を行っている。研究部の掲示板に、公開授業の概要を掲示し、部会のメンバー以外の先生方も気軽に授業を参観している。事前に指導案がなくてもよいし、公開したいその日に連絡してもらってもよいことになっており、授業者も気軽に公開できるようになっている。授業は、事前の綿密な話し合いよりも、事後の研究会によって上達していくという本校の実践研究の表れでもある。

2. 部会における教師の協働関係を探る

平成20年度も4つの部会が編成され、週1回定期的に時間が設けられている。私が所属するB部会は、社会科の私（勤務7年目）のほかに、研究企画の音楽科のS先生（2年目・男性）、保健体育科のY先生（2年目・女性）、理科教員のN先生（1年目・女性）という構成になっている。

（1）B部会の活動を振り返る

○4/24 1年目のN先生のためがみんなのために ―研究集会に向けて―

研究集会(6/6)までは、公開する授業の検討を中心にすることを確認する。今回は、1年目のN先生に対してわからないことを説明するための部会となり、話題はまず研究集会に配布する座席表についてであった。

座席表の目的は、個の学びを参観者が見るためにあり、授業者が今までの子どもの学びを振り返るためのものであり、そこにこの時間で子どもたちに期待する教師の願いが加わるような資料になるとよいという話を、私がした。

研究企画として進行役のS先生から、当日は要項の学習展開案、当日の学習展開案、座席表の3つを参観者は手にすることになるが、どれを見るのだろうかという問いが投げかけられた。座席表があると授業を参観するときはわかりやすいが、細かすぎると逆に読みづらくなり使えないものになってしまうという意見が出た。また、「計画と実際」が要項と当日の学習展開案の両方に記載されているのでその変化を見てほしいと参観者に伝えているが、それがわかりづらいのではないかという意見も出された。

私が持っていた信州大学教育学部附属松本中学校の「進行計画」「学習指導案」を提示し、よい部分を参考にするように話した。座席表には、見取ってほしい子どもについて記載されていたので、そのことについて話題になった。

見取る個人をどのように特定しているのかということについて、「まずは教師側から見て理想的な子どもを追い、そこからわからない子ども、できない子どもが見えてくるのではないか。」ということから、「わかる(できる)子どもとそうでない子どもの関わりの中で、うまくいっているグループとそうでないグループをどのように教師が受容していくかにながっていく。」という意見が出された。そして、「一斉指導では、座席表に記載できない。」という意見が出された。

私が、座席表を示すことが今年度のサブテーマ『子どもの学びを見取る』の提案の1つになるのではと話した。S先生からは、音楽の授業ではグループごとに記録係を決め、振り返りノートに書かせているという話があった。その話を受け、N先生は前回の研究会で美術科の先生が話した内容を受け、教科によって毎時間の振り返りは必要ないのではと発言した。また、「記録をとることばかりに一生懸命になってしまうと、子どもは疲れる。」

「いい班ばかりの記録を見てしまう。」といった、記録を毎時間子どもがとるということに対しての反対の考えや、「内容のいい発言をする子どももいれば、発言はしないがいい内容を書く子どももいる。」という発言だけで学びの本質は捉えられないといった意見も出てきた。

1年目の先生にとって、6月の研究集会は未知との世界であり、部会内での自由な話し合いは大変貴重な時間となってきている。この日は、授業というより座席表や学習展開案といった資料についての内容になっている。

部会のメンバーが勤務年数が若いということもあり、1年目のN先生だけではなく2年目のS先生からも子どもを見取るということについて疑問に思うことやわからないことが出されている。自由にいえる雰囲気、このB部会には存在している。

○5/8 5/9 5/20 年に1回の事前検討 —研究集会の授業についての検討—

N先生の授業について、話し合いを行った。学習展開案の中にあるほかの単元とのつながりについての記述については、1年目なので前任者の実践を参考にするということがあった。

N先生は、本時をどうするか悩んでいた。子どもたちが、燃料電池自動車を速く走らせるための要素（水溶液とその温度・電極・車体の材質）にどう気づかせるかについて話し合いが行われた。

続けて、5月9日にはY先生、5月20日にはS先生の授業についての検討を行った。

○5/30 ほかの学校の先生方からの意見はどう響いているのか 一事前研究会の報告一

研究集会に向けて、指導助言者と研究協力者が集まり、単元全体の構想や当日の授業について意見をいただく事前研究会が毎年行われている。その事前研究会でどのような話し合いがあったかについて報告会を行った。

保健体育の授業で、Y先生はヒップホップにチャレンジする授業を構想していた。

Y先生：本時について、「先生の視点がないとバラバラになるよ。」といわれたがまだよくわからない。「決まった動きをつなぎ合わせるのはいかがか。人と違う動きをするのが（ヒップホップ）の特徴だ。」ともいわれた。（公開授業のクラスではない）C組では、3つのステップを組み合わせさせてやっている。

向 当：ヒップホップを教えるのではなく、それを通して何を教えるのかが大切なのは。集団演技の創作とかでのいいのではないか。

事前研究会は、例年、研究集会の約2週間前くらいに開催され、この時にはすでに授業公開する単元に入っていることが多い。事前研究会のアドバイスは、授業授業を方向付ける重要なものとなり、否応なく授業者の心にしみていく。

会話はさらに続いていく。

S先生：音楽でもA組とC組では違う展開になる。

N先生：研究集会の授業は、子どもたちに悩んでいるところを出させてはどうか。

S先生：ほかのグループの演技を見る視点を出してからいわせるとよい。

音楽でもクラスによって違う授業が展開されていること、どの場面を公開授業で見てもらうのかということが出てきた。同じ悩みを共有しているからこそ、自分の教科や異聞の授業に重ね合わせていることがわかる。

1年目のN先生は、子どもたちが探究した燃料電池を使って車を走らせるという授業に取り組んでいた。事前研究会を終え、これまでの授業を振り返りながら、さらに悩みが多くなっていったようである。燃料電池の条件が多すぎるので車の軽量化はすべての班がするようにしてはどうか、試走の段階を見せたいが個人の競争では協働にならないのでプロ

ジェクトチームを組ませて行ってはどうかなどの意見が出された。

約2週間前に行われる事前研究会。大学の先生方、公立学校のベテランの先生方からの意見は、心にしみる。授業について苦しんでいる時期だからこそ、わらをもすがる気持ちとは裏腹に、進むべき方向に戸惑う本校の教員。

Y先生のヒップホップダンスの授業は、昨年に引き続いてのダンスの授業である。創作ダンスという題材は、いろいろな要素が絡んでいるものでその要素についての教師の視点、すなわちどのような技能を習得させたいのかという教師の目標があるのかというアドバイスをこの事前研究会でもらったのである。Y先生が悩んでいることそのものであったからこそ、Y先生にとってはその視点を明確にする必要性を強く感じたのである。それは、このあとゲストティーチャーを招いて授業を展開していることからわかる。

○6/5 いよいよ明日に迫る研究会を前に —授業構想の最終報告—

いよいよ研究集会を翌日に控え、それぞれがどのような授業を展開しようとしているかを報告し合った。

テレビを3台使うようになった。「探究のあゆみ」(前回の研究会で座席表を本校ではこうよぶように決めた)は子どもが書いたイラストから見取ったことを座席表に記すことにした。(Y先生)

「探究のあゆみ」は中間に行った振り返りをのせる。授業はタイムトライアルをする。自分たちのグループで悩んでいるところやアドバイスをもとに話し合い実験させたい。(N先生)

明日は中間発表から入るけれどまだできていない。話し合いでは視点を与えるべきか否かを考えたが、あえて視点を与えずにどういう音が聞こえてきたかなど、質疑応答形式でやっていきたい。(S先生)

明日の授業は、調査が完全ではない班の発表に対して教師がコーディネートしていく。中間発表ではないが、発表から、(沖縄県に力を入れるべき産業は)観光業に絞られるだろう。しかし、農業に話が展開するかもしれないので、持っている資料をもとに広げていきたい。(向当)

ここまでの実践を振り返り、そしてさまざまな意見をもとに、明日の授業構想を述べている。「探究のあゆみ」について、そして授業展開のデザインについて構想について、まさに所信表明演説さながらの強い意気込みを感じた。

○7/3 研究を進めることはむずかしい —A部会の授業研究会を終えて—

6月30日の教育実践研究会で、A部会の提案授業(技術科)についての授業研究会が開かれた。この日は、部会で提案授業とその授業研究会についての感想をもとに話し合いが

進んでいった。

S先生：研究主任の最後の言葉「学びを見取る」ことはどうだったのか。A部会はめざしていたのか。生徒Sからのコメントは本当なのか。実際の姿とずれている。子どもの状態がわかる学びの質を見取っていかないといけないのかな。

次は、B部会が提案授業をする。そのことを意識してか、研究企画であるS先生は、サブテーマ「子どもの学びを見取る」と提案授業及び授業研究会のつながりを気にしているのであろう。

見取りについて、会話は続く。

N先生：10分で新しい発見を見つけられないかと思って見ていた。でも、なかなか見られない。言葉はひろえただけ…。

Y先生：私が見ていたグループは、ワークシートに書いてあることをしゃべっているだけだった。

S先生：丸1時間見ていた。ちょっと見るだけでは見えない。過去に10分だけ提案授業を見に行ったことがあるが、1時間見ないと見えてこなかった。

N先生：(研究集会の授業で)参観に来ていた先生から「見取りが難しかった」といわれた。

授業を参観するとき、授業のある先生は自習体制にして来るのでまるまる1時間を参観することができない。10分の参観で子どもの学びを見取ることができるのかどうかということが話題になっている。話は学びのプロセスをどう見取っていくかにつながっていく。

S先生：授業者は全体を見ているので、子どもの何を見ていいのかわからない。また、子どもの事実の前後がわからない。ICレコーダーや記録を子どもにとらせたりしている。昨年は実践記録を書くことができなかった。

Y先生：子どもが振り返りを書くことについてはどうなのか。

N先生：自分の授業では形だけになっている。

S先生：自分の授業では感想になっている。教科的な話が出るとよい。鹿毛先生からは、昨年のラウンドテーブルで1時間ごとの振り返り、単元の振り返り、数単元の振り返りが必要であると教えていただいた。

学びがどう進んでいったのかを、記録をもとに辿っていく。その記録をどう残していくのかは、授業実践においては重要なポイントである。S先生は、今年毎時間子どもに記録をとらせている。実践記録を書くことを意識してのことであり、この記録については4月24日の部会でも話題に上がっている。

○7/10 悩みは一段と深まる —実践レポートをどう書くか—

夏季教育実践研究会（7月28日）に提出する実践レポートについて、前回の研究会で書き方についての提案があり、今回の部会はそれを受けてどう書いていくとよいかについて話題になった。

S先生が昨年の実践をどう書いたかについての話から始まった。1年目に書いた実践は8時間分であるが、その中の2時間はつながっていない内容であること。生徒を迫るのではなく、自分の視点で「意識の高揚」と「技術の向上」という2つの視点で書いたこと。

続けて、探究について悩んだことも話し始めた。福井大学ラウンドテーブルで、鹿毛雅治先生が私の実践を読んで「この実践は『主題－探究－表現』型ではなく、『目標－達成－評価』型の授業」といわれたことや、音楽の授業は、自由な創作と技能の達成という2つの面を持っているということも話していた。

昨年と今年、2年続けて研究集会の授業でダンス運動を実践したY先生はこの話を受け、次のように話した。記録を残さないといけないといわれ、これまではカードを書かせていたこと。今年の実践は、公開授業のデータをもとに書いた。1つのグループだけにはりつけないし、発表会までに、グループ間に差がつくので、今年はビデオを撮るなどの工夫をしたことなど。

Y先生は、自分が苦勞したことを話したあと、「創作ってむずかしくない？」とS先生に語りかけた。創作は自由で幅が広いけれど、どう収束していいかわからないという。同じ技能系の教科として、探究を創作という活動に関連させての話になっていった。

S先生は、先ほどの自分の話と関連させて、合唱は探究できないということ、音程がなくてもいいのが探究になること。サウンドスケープは音楽ではなく、諸要素が入ってきて音楽になり、音楽という枠は広がってきていることを話した。

Y先生は、グループの創作したものにアドバイスしあうのはどうかという疑問を話す。グループで創作するのは難しく、創作とは一人でするものだとも話した。

このY先生の話を受け、グループ同士のアドバイスはどのように行ったらよいか議論された。その結果、アドバイスはしあった方がよいこと、感想を言いあうとよいこと、個人の作品ではなくチームとしての作品だとアドバイスがしやすいことなどが出された。

この日の部会は、まさに自分の悩みがそのまま表出された時間となった。1年目のN先生よりもむしろ2年目のS先生、Y先生の方が多く発言している。1年目はがむしゃらに、見様見真似で実践研究してきた先生方は、2年目になり自分自身をより深く見つめることができるようになってきているのだろう。そもそも探究型の授業ってどんなことなのか、協働で創作していくということは意味があるのか、こうした素直な疑問は小さな部会だからこそ発言できるのかもしれない。

研究集会を終え、その時の公開授業を含めて単元や題材を実践記録として残していく。この実践記録を書く際に、授業デザインの重要性を改めて痛感する。だからこそ、前述した疑問が浮かび上がってくる。実践記録を書くという文化は、授業を捉え直すことに自然

につながっていくのである。

○10/6 言葉1つにもそれぞれの想いがある –サブテーマについての話し合い–

9月29日の研究会で、新しいサブテーマ『個の学びを高める協働探究をデザインする』が提案された。このサブテーマについて、研究会では意見が言えずにいたメンバーは、この日の部会で自由に意見を交換しあった。

S先生：「デザイン」に代わる言葉はない。デザインには抵抗があるが…。

Y先生：「デザインする」というと最初から最後までというイメージがする。「考える」だといい。

S先生：「デザイン」は今からしていくというイメージ。気取った感じがする。

N先生：日本語でもむずかしい言葉を使うのはよくない。

Y先生：「デザインをする」？

「デザイン」という言葉について、それぞれの想いが語られている。言葉から受け取るイメージは個人で異なるが、その言葉と研究とをつなげるということになるとなかなか全体の場では意見は言えないことが多い。自由な意見交換は、全体の場では出てこない意見がわかり、研究企画会でも取り上げられていく。

話は、研究主題に向かっていく。

S先生：グループとコミュニティはどう違うだろうか。

N先生：グループは勝手に分けられた目標が一緒ではない、コミュニティはほかとの関わりがあるという感じ。このサブテーマの「個の学びを高める」というのは、グループ活動によってあいまいになっていた部分。

S先生は、研究主題の言葉である「コミュニティ」という言葉の定義をN先生に問うているのは、1年目の自分を振り返ってみて、「コミュニティ」という言葉の意味がよくわからなかったのではないか。N先生の自分なりの解釈の発言内容に、ほかのメンバーは驚いた。

会話はサブテーマに再び移る。

S先生：1年次サブテーマの見取るの定義は、アクションまでを含んでいた。

Y先生：見取るってむずかしいよね。

1年次サブテーマ「子どもの学びを見取る」は、研究テーマとして難しさを感じた先生が多い。S先生は、見取るとは子どもの学びを捉えるだけでなく、教師の次なる行為や実践（アクション）につながっていくということについて自分では納得できていないのかもしれない。Y先生の発言からも、その解釈の難しさが読み取れる。

研究企画から出された提案について、さらに話が続く。

S先生：共通して取り組むこととして、「コミュニティを育む主題の在り方を探る」というのが提案されているが…。

Y先生：最初から授業がこけたら？

「主題－探究－表現」型を基本とする授業構成から、2年次はその中の『主題』に重点を置いて研究を進めていこうという意見をS先生は部会で紹介した。そのことについて、Y先生は上記のように答えたのである。主題がうまく設定できなかつたらという意見は、主題にのみ研究の重点を置くことの矛盾を指摘している。Y先生は、自分なりに授業デザインを思い描いているのであろう。

○10/27 授業を協働でデザインする －B部会提案授業についての話し合い①－

本校では、毎年4つの部会がそれぞれ1つの授業を公開し、その授業についての研究会を行っている。以前は、1年目の先生が授業を公開し、研究企画が授業研究会を運営していたが、3年前くらいから各部会年1回とし、授業記録の見取り方や授業研究会の持ち方についても各部会で新たな提案をするようになった。

B部会では、授業者として理科のN先生（1年目）に決定した。この日は、1年生の授業『強度な橋の秘密を探ろう』の簡単な学習展開案が提案された。橋のタイプとして、四角タイプ、三角タイプ、円タイプの3つを提示し、それが一番丈夫かを予想して検証する。そして、なぜ三角形の橋が一番強度が強いのか、その理由を考えていくという授業の流れである。

ほかの先生からは、「三角形の形に関係はあるのか」「三角形の数はいくつでもいいのか」「円を円柱のようにたててはいけないのか」「三角形を置く場所はどこでもいいのか」といった意見が出された。子どもたちに探究させていく上で、条件が変わると出てくる意見も異なってくる。様々な方法での探究はかえって子どもたちを混乱させ、授業が楽しいものでなくなってしまうことを改めて考えさせられた。

○11/4 新たな提案をするN先生 －B部会の提案授業についての話し合い②－

前回の部会で提案された授業が探究型の授業としてどうなのかということを受け、N先生が新たに提案した授業は、『綱引き必勝法！』。授業の流れは、力についての基礎的な内容を習得した後の授業として位置づけており、まず、今年の体育祭で自分たちの綱引きの様子をビデオで見る。そして、どうしたら綱引きに勝てるのか考え、グループで検証していくという授業構想である。

この授業構想に、ほかの3人はまず新たな授業をわずか1週間で考えてきたN先生の授業構想力に驚いた。さらに、この綱引きの授業の方が生活経験に基づくものであり、子

もの興味を引きひきつけやすいということ、大きなところからぐっと理科的な内容に絞り込むダイナミックなデザインであることなどから、探究的な実践の可能性を持つ新たなチャレンジであることを、ほかの先生方も感じていた。

○11/5 S先生が考えた参観方法 —B部会提案授業の記録について—

この日の4校時に、N先生の授業が公開された。参観の方法及び記録については、次のように指示があった。

・授業の見方について

…「発言及び行動の記録」は、グループ全体の事実（会話や行動）を記録する。その中で、1人の生徒に焦点をあて記録者の気づきをまとめる。会話や行動は、時刻と生徒名がわかるようにする。

・記録について

…生徒の会話や行動は、前に打ち込んだ人のところに追加する。参観者の気づきや思ったことの後には氏名を書く。各班のワークシートの下に「全体を通して思ったこと」を記入する欄を設ける。

○11/10 自分の教科に重ねる —授業研究会の持ち方を参観記録から探る—

研究企画のS先生が、B部会提案授業研究会の司会である。2年次サブテーマ『個の学びを高める協働探究のデザイン』にどうつなげていったらよいかという不安が、いつもS先生の頭の中にあった。

私は、ほかの先生方がかかれた授業記録や授業の感想をふまえて、次のようにアドバイスをした。先生方が書かれた内容は、おおよそ理科という教科としての探究の在り方、この後の授業展開や3年間を見通した授業デザインなどがおもなものになっているので、授業の様子について各グループでどのようなことが起こっていたのかを語っていくと、自然とそんな話も出てくるのではないかと。子どもの様子から個の学びを語ってもらい、参観者がこれからの授業をどうデザインすべきかを考えてもらえばいいのではないかと。

授業はもうすでに次時が終わっていて、子どもたちはバネを使って測定することができるようになったとN先生から話があった。次時の授業で、N先生は今回の授業の反省をすでに修正していたが、そのことについては授業研究会の最初で言うのではなく、最後の方に伝えたらどうかということになった。

授業研究会の持ち方の話は、理科の授業における探究についての話にもつながっていく。そして、S先生は、自分の教科（音楽）について話し始めた。

S先生：音楽は収束していかない。身近な言葉を通して、要素に気づかせたい。

Y先生：最終的にどこに向かうの？

S先生：「オーシャンゼリゼ」「かえるのうた」を自分たちにアレンジする。楽器の種類や声を使うが、子どもたちの考えが浅いので、子どもたちが調べる。こうしてコミュニティがつけられていく。

N先生の提案授業は、身近な事象から入り徐々に教科の専門性へと収束していくダイナミックなデザインである。そのことをふまえ、S先生は自分の担当教科である音楽と重ねあわせて、今自分が取り組んでいる1年生の授業構想について話している。S先生は、音楽科で探究が可能なのか、協働で取り組む必要があるのかといったことにいつも疑問を持っている。N先生の授業を参考にして、自分の実践をより高めたいという想いが強くなったのだろう。

○11/10 部会メンバーが率先して発言する —B部会の授業研究会—

この日の研究会で、B部会提案授業の授業研究会が行われた。B部会研究企画のS先生が進行役となり、まず前半はグループの様子、後半は授業全体のデザインについて話していきたいという旨が伝えられた。口火を切ったのは、そのS先生。

S先生：1班を見ていて、最初は生徒Fを見ようと思っていたが、生徒Tの方が言葉が多いのでTを観察することにした。ばねを2つのニュートンはかりで引っ張る実験をして、ばねにおもりをつるしてそのばねの途中を持つのと上の方を持つのではどちらがばねが伸びるかを検証していた。上の方を持つ方がばねが伸びることと重く感じることから、綱を長く持った方がよいという結論に達していた。

Y先生：生徒Aと生徒Rの体育の授業との違いを見たくて、2班に注目していた。生徒AとRは、おもりをどこに付ければいいかで盛り上がっていたが、生徒Kは勢いよく引く方がよいと考え、それを一人検証しようとしていた。12時20分ころから持つ位置の違いによる引く力の大きさの変化を調べようとしていた。器具がある方が会話が進んでいた。

5班、7班の様子について、それぞれ1人の先生から報告があった後、私が7班の様子について次のように話をした。

向 当：生徒Dと生徒Yがかみ合っていなかった。生徒Dの発想でさまざまな方法を試し、最後には実験台を離れ手の試行錯誤が続いていた。この単元のデザインが、習得一活用の流れなら、それまでの学習が本時は見えてこなかった。

私は、社会科においても習得と探究をどうデザインするかを考えて単元全体の授業構成を考えている。N先生の授業を単元全体で捉えたとき、習得として位置付いているであろう基礎・基本が個の探究の授業にどう生かしていくべきかを考える必要があるというつも

りで発言した。

ここで、それまで一言も話さなかった（話す機会をもらえなかった）N先生が、初めて口を開いた。

N先生：『綱引き必勝法』を提示したのは、本時が初めて。綱引きということで、子どもたちの思考から1から4時間までの内容が飛んでしまったのかも。

この後、再び参観したグループの様子についての意見交換があり、最後にN先生がこれまでの研究会の話を受けての感想を発表した。

N先生：KJ法をはじめ、自分でも収集できなくなってしまった。この授業の次の時間、生徒Mの班の考えを全体に紹介し、この班の例をもとにほかの班も真似をして取り組んでいった。

KJ法についての意見や次の時間の構想についても議論されたこともあり、N先生はその意見や構想に答えた形で発言している。

私は、久しぶりに充実した研究会になったと思った。公開した授業はもちろん、授業のデザイン、教師の手立てなどについても多くの意見が交換されたからである。

○11/30 研究企画はどう授業研究会を見たか —B部会授業研究会を振り返る—

B部会の提案授業を受けておこなわれた授業研究会が、主題解明に向けた話し合いになっていたか、また、どのようなことが明らかになったかについて、研究企画のメンバーで議論した。

S先生：今回の授業の提案はサブテーマに則り、まずは個の学びに視点を当てたいと思った。記録用紙にあった通り、班全体の事実から個の視点で見取った上で、授業が見ていくこととした。全体を通した話すことにより、後半の授業のデザインという方に持っていきたかった。本時は、自分が考えを深めていく場面が多かった。次時なら子どもの考えの変容が見えたかも知れない。全体の中で、手立て論になっていくのではと危惧していた。今回の授業が協働探究をデザインするというので、授業自体は、子どもの意見がたくさん出ていたおもしろかった。研究会では、提案まではもっていけなかった。

E先生：自分の経験から意見を言っていた。科学的根拠がないことも多かった。本当に意味があるかを考えていく中で、気づいていくことが個の学びを高めるのでは。本時は経験と科学的思考をつなげる授業。至民中や丸岡南中の研究会に参加して、見取りだけで終わってしまっていると感じることがある。手立て論、タブー視せず考えていく必要があるのでは。

向 当：1時間だけでなく、今後の展望ということを考えていた。理科は大きいところから入って、すぼめていくことが大切ということ全員が感じた。見取りにくくて話しにくい授業ではなく、今回はデザイン的なことも含めて可能性を語ったのが大きいと思う。来年の単元構想が見えたと言っていた。

S先生はサブテーマを意識しての研究会を考えており、子どもの学びを語ることだけではどうなのかと思っていたのであろう。それに対し、E先生と私は、授業研究会で出された先生方の意見が教科を越えて語ることの良さを述べている。しかし、S先生は進行がうまくできなかつたと続ける。

S先生：B部会では、細かい赤い話もできる。研究会の場ではやりにくい。

研究主任：N先生が失敗したとっていたのは、絞る部分をうまくもって行けなかつたことを言っていたのでは。授業研究会そのものについては、前半、後半と分けても、別のものではない。最後は探究のサイクルの話など広げていけたと思う。理科の段階的なデザインに関しての高橋先生の質問にはうまく答えられなかつたのでは。

T先生：国語研究録は1年生よりも2年生と繰り上げていきたいという思いで取り組んでいる。専門性が足りないような気がする。木本先生の授業では3年生で力の内容を見た。今回の1年生からどのように繰り上げていくのかに興味があった。昨年までの研究の子どもの見取りということで、手立て論も必要ということを確認したと思っている。向かうべき方向に向かって行くように方法を考えるのは当然。それをデザインという言葉で表現している。本校で手立てという言葉が嫌ってきたのであれば、型にはめる方法のことだと思っている。思っていることを考えるだけでなく、教師がどうするかということが大切。研究会ではKJ法の縦軸、横軸を話した。このことを話さないと研究が深まっていけない。

本校の研究は、子どもの学びをもとに語られたり記録として残されている。教師がどのような学びを子どもに期待し、どのような手立てを準備し、どのような方向付けをしているのかを決して表に出してはいけないのではないかと考えている先生方が多い。

研究主任やT先生の言葉は、それまでの自分の経験やそこから生まれている想いを語っている。こうした言葉は、これまでの研究会ではあまり出てこなかつた内容である。

続いて、私が研究会で発言した内容について再度話をした。

向 当：理科の単元では分力とか使わなくてもいいのか。授業者がどのように分類していくというもデザイン。今回は習得が切れているように感じた。前やっているのであれば、出てこなくてはいけない。あとで習得させていくやり方もある中で、今回はどうだったのか。

研究主任：今の向当先生の発言は、最近意識している課題。11月中旬に授業を見てもらおうと思っている。昨年は化学反応式に関して、粒で考えていくことをやった上で見ていただいた。そこでどれだけ化学反応式を有効利用できるかが大切だが、化学反応式自体を使っていないと思った。今年は同じような授業をするが、概念なしに授業に取り組みさせたときに、探究活動で概念をどのように作っていくかということをやりたい。知識は使わないと自分に落ちていけない。永廣先生は今回の授業に向けて、時間がない中で詰め込み的に授業をしたようだ。そのため生徒に残っていないと感じる。しみこむ時間が必要。

向 当：黒板で分類したことが、概念ではなかつたか。ここがしみこむ時間だったのでは。あとでしみてくるのかもしれないが。

T先生：摩擦という専門用語がやっと出てきた。これを前の時間にやったよねとか触れていなくてはいけない。

N先生と同じ理科担当の研究主任が、習得を巻き込んだ探究型の授業にチャレンジしたいという話があった。習得をどう探究の中に生かしていくかは、本校にとって常にチャレンジしていくことなのである。

次に、子どもたちから出たいろんな意見をどのようにまとめるかについて、KJ法についての話し合いに移っていった。

研究主任：何を軸におくかも深い教材研究があった上でのこと。深い洞察や先を読んだ教材研究が必要。

向 当：KJ法の縦軸とは。カテゴリー分けはするが。

T先生：国語は編みこむことが大切。

向 当：1回分けたあと、違う視点で分けるということか。

研究主任：竹内先生のマップづくりもXY軸に置いている

T先生：カテゴリーだけでは絡みが分からない

KJ法について議論されたことは、教師の手立てについてはタブーではないかと思っていた先生方にとっては驚くべきことなのかもしれない。それまで、教師の手立てについてはほとんど議論の俎上にのることはなかった。子どもの学びの姿を語ることに終始する研究会が多かったともいえる。

次の提案授業を行うC部会の研究企画であるY先生が、論点を変えた。

Y先生：次のC部会のことを意識していた。今回は見取ったことから、理科としての視点を語っていたグループの様子を話していることを、司会が見取って、しゃべってもらうか、収束していくか見極めなければならない。今まで区切って司会をしていくことが染みついている。司会者とはという命題を自分に投げつけてしまう。今回は子どもの思考を追うことができた。

T先生：N先生に失敗したと感じたことを話してもらおうとよかったのでは。放課後N先生としゃべった。私は本校に来たときは、頭の中に本時の目標から始まるPDSサイクルがあり、その中で授業を考えていた。この学校は探究型なので迷っていてもいい。宮谷君は知識で言ったことが実証できないと分かったことが学びだった。

向 当：永廣先生は分類とか、発表させたことが自分のイメージと違ったということが、失敗と感じていたのではと思う。子どもが失敗したほうが授業は見やすい。丸岡南の授業は見ていて面白くなかった。

Y先生：研究授業はいい授業を見せないといけないと思っているのでは。それが子どもにとってよかったかは、分からないが。

向 当：研究授業ではなく提案授業。新しいことに挑戦していくことが大切。

Y先生の授業研究会の司会者として、昨年もその難しさを訴えている。また、研究授業

をする授業者はやはり大きなプレッシャーがあるという話を聞いて、「提案授業」は失敗してもいいというアドバイスをしている私であるが、授業者の気持ちは私もよくわかる。いい授業をしたいというのは、教師の永遠の願望なのである。

○12/1 授業のデザインを語り合う —B部会の授業研究会を終えて—

この日の部会で、N先生はこの前の自分の授業の研究会について、次のような感想を述べた。

失敗がたくさんあった。例えばKJ法。ほかにも考えを導くこと。でも、ほかの先生方が子どもの筋に沿って見てくれるので、あの研究会があってほっとした。子どもたちは悩んでいたが、考えは精選されていった。あの1時間は、悩みの中の1時間ととらえている。

本校は、授業会を気軽に行い、日常的に教科の壁を越えて研究が行われるようにしている。そのためにも、授業研究会は授業者が「まな板の鯉」にならないように、そして参観者にも益のあるものになるようにしなければならない。授業公開と授業研究会は、教師の力量形成という点で学校の実践研究に多大な影響を与えるものである。

N先生の言葉を受け、次のように話が展開していく。

S先生：(この授業は)実生活の中から入っていくのがいい。数学の授業ともつながっている。机上の空論ではないので、多様な考えが出てきている。教科の専門用語を使っていきながら、何が大事かを探っていく授業だ。

N先生：来年は題材をもっとシンプルにしたい。

S先生は、C部会の提案授業である数学の授業とN先生の提案授業の共通点として、実生活から教科の専門性に入っていくデザインに感心している。音楽科における探究を模索し続けるS先生にとって、連続した提案授業のデザインは参考になったと思われる。

続いて、授業研究会のことに話が移っていく。

Y先生：(今回の授業研究会で)授業者が話したいときに話すのはよかった。

S先生：前回部会の中で、教師の手立て論にはしてはいけないと思っていた。手だて論がダメなのではなく、少しでもみんなが話をしてくれることがよいと思った。

KJ法についての議論が、教師の手立て論について語ってはいけないと思っていたS先生にとっては画期的なことだったのだろう。

話は、C部会の提案授業に移った。

S先生：C部会の提案授業で見てほしい点として、「数学の核となる学び『関係を探り構造をつかむ』との関連」と「グループ」になっている。

向 当：この数学の授業によって、1つの式に意味があると思うようになるのではないか。自分も受けてみたかった。

Y先生：私もそう思う。自分たちで問題をつくることは、小学校でもあるがむずかしい。

S先生：（この授業では）言葉が使えないといけない。

向 当：文章からイメージが浮かんでくるのだろう。

生活の中から入っていく数学の授業デザインは、参観者に大きな刺激を与える。1つの答えを導くのが数学であると思っている者にとって、文章を式に表す授業は衝撃であった。さらに話は、授業のデザインについて語られていく。

向 当：（つくられた文章が）教科の中に入っていくものと入っていかないものがある。

S先生：「ただし、摩擦係数を0にする」など、条件を出すことがよく高校や中学校の問題文の中にある。

Y先生：条件がつけられるようになるといい。

S先生：そうやってコミュニティが生きてくる。そして大事になってくると思う。

自分たちでつくった文章を式に表す授業が、これからどのように展開されていくのかを議論している。こうした次の授業について考えられるということは、単元全体を見通した主題に貫かれたデザインになっているからであるからであろう。

○12/6 音楽科のチャレンジ – S先生の授業公開 –

12月11日に、S先生が授業公開することに決まる。授業構想は以下の通り。

1年B組で、曲のアレンジをする授業。「かえるのうた」や「オーシャンゼリゼ」などです。メロディが強いJ-POPは、伴奏の印象が強いのでアレンジを分類してその中の1つを意識してする。

本校は、音楽が学校文化として根付いている。そして、音楽科のカリキュラムもその学校文化とともに実践され創られてきた。S先生は、そのカリキュラムを実践し再構成していく中で、少しずつ自分の想いを入れていくようになってきた。そして、今年のB部会の理科の提案授業、C部会の数学の提案授業とそれぞれの授業研究会を経験していく中で、音楽について次のように述べている。

大きいところから入って、3年間で絞られていく。ロングスパンで見たいかなあかんのかな。

生活経験からダイナミックに入っていくこと、そこから教科の本質に収束していくこと、3年間を見通して単元を構成していくことなど、S先生の気づきがこの言葉に凝縮されて

いる。

○12/15 大きなところから入る授業をデザインする – S先生の公開授業を参観して–

12月11日に公開された1年B組音楽の授業について、まずN先生がロックとJ-POPを選んでいる生徒が一緒に班になっているのはどうしてかと質問した。それに対して、S先生はこう答えた。

(この単元の構成は)大きく2つあり、1つはジャンルについて調べる。ジャンルを1つ絞って定義してくれと言ったら、自分の調べたいジャンルで子どもたちはグループをつくった。自分たちでアレンジしようと集まったグループである。曲レベルでは、Aレベルが「キラキラ星」「かえるのうた」でメロディしかおぼえていないイメージの曲。Bレベルは、「オーシャンゼリゼ」でピアノ伴奏としてのイメージの曲。Cレベルは、J-POPまたは自由な曲で、相当工夫しないと難しいよと言ってある。「super shine」を選んだグループは、そのままできているので変えるように言った。リズムとテンポでアレンジしようということが一緒という共通で集まった。

N先生は独自のジャンルを創るといふことなのかと質問した。この質問に、S先生はこう答えた。

たとえばロックでも、演歌といえは演歌になる。いろんなジャンルからエキスをに入れて創り上げていく。この実践は核となるカリキュラムではない。「これは音楽か？」と生徒に問い直したい。1年生は今から学年の歌作りに入っていくので、思い入れが入っていく。音楽科の核となる学びの課程ではまだない。アレンジは難しい。鼻歌レベルという感じ。

N先生は、「これは音楽じゃないってこと？」と質問した。S先生は、この質問にこう答えた。

音レベルを音楽にしていくサウンドスケープなど、音楽観を広げていく中で足もとを見直す。聞いた人が感情を持つことが音楽である。例えば、狩りの合図の音も、意味があれば音楽。クラクションも音楽。伝えたい想いがあると変わっていく。すばらしい作品ができてから、「音楽か？」と問いたい。

この後、Y先生や私が参観していた子どもたちの様子や感想を話した。Y先生は、担当教科の体育につなげて話し始めた。

Y先生：ダンスの題材で自由にすると、まとまりがなくなってしまう。3年生なら少しはできると思うが…。(この授業は)1年生でしょ？

S先生：作曲をするともっと具体的になるのかな。

Y先生：私も来年やってみようかな。ジャンルも音楽も自由にして。

S先生：3年生で変化が出ればいい。今回の授業は核となる単元をはずしてみた。今年この授業を提

案して、来年につなげていく。

技能の習得と協働の活動の2つにはさまれながら、試行錯誤していく音楽科と保健体育科。同じ迷いや疑問を持ちながら、たがいに参考にしていこうとする前向きな姿勢が、2人の会話から伝わってくる。

○12/22 省察って何を書くのか —出版のための教科編集会議について—

来春、本校は本を出版する。そのための編集会議が教科ごとに開かれているが、その中で出版本に記載する各教科の実践を手直しする話し合いが行われている。ほかの教科編集会議でどのようなことが議論されているのかを知りたいということから、理科の編集会議でのことをN先生に語ってもらった。

省察では、単元の構成とコミュニケーションの場の設定、子どもに何を学ばせたかったのかなどについて書くことをアドバイスされたという。また、個人の学習ではできない協働学習の良さを書くようにもいわれたという。

ここで、協働学習についての話が変わった。協働学習は、わからない（できない）子どもにわかる（できる）子が教えることをいうのか、そうだったらできる子に学びの成長はあるのかということについて意見を交換した。S先生は、音楽という教科の特性から、技能の習得を第一に考えている。多様な学びが生まれるのはいいが、それによって本質に向かっていけないのではないかという疑問を常々口にしている。このときも同じようなことをS先生は話した。私は、達成・習得を目指すのか、そこにたどりつくまでのプロセスも含めて学びというのではないかと話した。

続けて、Y先生がこう話した。

教師がどれを第一優先と考えるかだよね。

音楽科と同じ技能の習得を目指す体育を担当するY先生もまた、個の学びについては悩んでいる。個の技能の習得と協働の学習のつながりについて、同じ本校勤務二年目の先生の共通する悩みなのかもしれない。しかしながら、Y先生のこの発言は自分自身で導いた1つの答えなのかもしれない。

（2）部会というコミュニティ

部会メンバーは、研究主任が勤務年数や教科を考慮しながら毎年決定するので、その年のメンバー構成によって話される内容や論点が変わる。今年のB部会のメンバーは、私を除くと勤務年数が1年目と2年目の先生方である。それぞれの先生方の振り返りをもとに、部会研究のメリットについて明らかにしたい。

教科を越えた研究の良さを感じるN先生

教科を越えた研究は、公立中学校ではほとんど例を見ない。公立中学校から移動してきたN先生は、部会研究に何を感じたのだろうか。

同じ教科ではない先生方からの話は、理科の先生とは違った視点が多いという。理科の先生では気づかない視点、子どもの視点、素朴な視点からの意見が、いろんなことで参考になったという。Y先生も同じ様なことを語っている。ほかの教科の先生の話は、子どもも感じる事なのだろうという。この2人の話は、担当教科の先生方は専門的な内容を知っているが故に、授業を教師の立場から見ることになり、教師の発言や指導方法にアドバイスが多くなるのであろう。

また、4人という人数が言葉を選ばないで話ができただけなのではないかという。特に11月の部会提案授業の研究会をB部会で行ったことが印象に残っており、自分が感じたことをそのまま伝えることができ、その逆にほかのメンバーからも率直な意見をもらえたとし、もらえなくても自分の考えでいいよと感じることができたという。話をすることで自分の考えが整理できるが、N先生も話をしたことによって自分の授業がより明らかになってきたことを感じている。

ほかにも、6月にある研究集会の授業については、部会の中でいろんなことを教えてもらったことでどのようにしていけばいいのかがわかったという。

同じ悩みを抱えていることに共感するY先生

小学校から異動して2年目になるY先生。2年間部会を経験して、どのようなことを感じているのだろうか。

1年目の昨年は、話を聞いてるだけでの自分であり、部会では気軽に話せばいいということなど、部会についてわかったという。そして、美術科の先生と一緒に部会であり、同じ技能系の教科の先生も自分と同じ様な悩みがあることを知ってよかったという。そして2年目は、音楽科のS先生と同じ部会になり、同じ技能系の教科でも違っているところと似ているところに改めて気づいたという。

Y先生は、協働で探究していくという本校の研究の意義を疑問に思っていたという。「技能系の教科は、一人一人に技能が身につかないといけない。」それは、美術科の先生も感じていることではないかと、Y先生は感じていた。そして、音楽科のS先生も同様の悩みを持っていることも、部会の中で伝わっていたのであろう。社会科などの教科においても、探究型の授業が知識の習得という点においてどのように実践できているのかということが話題になる。しかし、Y先生にとっては、技能系の美術科や音楽科の先生が抱えている悩みに共感することにより、自分の悩みは決して特別なものではないと思ったのであろう。

また、S先生が12月に行った授業公開にも大きな刺激を受けている。いろんなジャンルの音楽をもとに自分たちでアレンジしていく授業構想が、体育の授業デザインと重なっ

ていることを感じたに違いない。12月15日の部会でY先生が話した、「私も来年やってみようかな。ジャンルも音楽も自由にして。」という言葉からもそのことが伺える。そして、12月22日の部会で私が、授業は達成・習得を目指すのか、そこにたどりつくまでのプロセスを大事にするのかがポイントであるというような話をした後で、Y先生が話した、「教師がどれを第一優先と考えるかだよね。」という言葉は、さらにY先生の想いを象徴した言葉として印象に残っている。

Y先生は、部会は悩みを互いに聴きあい、言いあえるところであるという。授業について部会のメンバーで語り合うことで、自分の教科である体育に活かせることが多くあったということからも、Y先生にとって部会研究が実践研究をより深めていくことにつながったといえよう。

2年目に大きく変わるS先生

「今年は部会運営を任せられ、開き直った。」…これが、S先生の2年目のスタートであった。1年目は、研究主任がいる部会に入り、自分が做わないといけないという気持ちが強かったという。部会で話されている内容がよく理解できなかったということもあり、今年は、2年目という立場でわからなかったことやわかったことを話せばいいのではないかと思ったという。同じ2年目のY先生と1年目のN先生と同じ部会になったということで、部会運営に対する責任感と同じ様な立場の先生方が多いという安心感も、S先生にとって大きく関係しているのであろう。

その一方で、S先生にとって7年目の私が部会の中にいるということで、安心して研究に対して自分の意見が言えるという。研究企画は、部会運営や提案授業の研究会の進行という大役があり、研究の方向性を指し示さないといけないというプレッシャーを感じざるを得ない。本校の勤務年数が短いほど、その想いは強くなるであろう。長く勤務している先生の存在は、研究企画にとっても部会にとっても重要であることを改めて感じる。

S先生は、研究についても多くのことを学んでいく。1年目は、附属中学校の研究にカベを感じていたという。Y先生や美術科の先生と同様に、技能の習得という点での疑問である。「話し合っただけで、それで〇〇科の授業なの？」…このような批判があったという。こうした批判は、保健体育科でもあったと聞いている。「まず歌え」「まず動け」というアドバイスを受ける中での、音楽科や保健体育科の先生方は、大きな葛藤があったのだろう。こうした悩みを抱えながらも、N先生のB部会の提案授業が、S先生にとって大きな刺激となったということは、11月10日、11月30日の部会の中での会話からも明らかである。身近な事象を含めた大きな題材からの導入という授業デザインが、S先生の新たな授業実践を生んでいる。教科を越えて研究していく意義が、このことから十分伝わってくる。

また、S先生は教師の手立て論について話をしてはいけないという先入観を持っていた。

しかし、部会の中で授業を検討したり、授業研究会をする中で、自然に手立てについての話（例えばKJ法など）が話題になっていったことで、S先生はその先入観もなくなったという。部会が大事にする同僚性は、研究について深めていくことと同時に研究を理解していくことにつながっていく。

（3）コーディネーターからファシリテーターへ

今年のB部会を振り返ってみると、私も含め先生方にとっていろんな面で有意義な研究になっているといえる。今年で7つ目の部会を経験しているが、部会で話題になったり議論されたりしていることは、少しずつではあるが変化している。勤務年数が長いメンバーが多い部会のときは、本校研究と関係の深い書籍を読んだり、実践記録を互いに読み合ったりすることがある。今年のB部会では、研究集会や実践記録についての議論、サブテーマについての意見交換、部会提案授業の内容と研究会の運営についての話し合い、そして部会公開授業といった小回りの利く充実した部会研究が行われてきていると思う。S先生も話していたことであるが、全体研究会では出てこない意見も部会の中では自由に語り合える。教師の協働研究という点から見ても、探究するコミュニティとしての部会の存在は重要である。

研究企画は、部会のコーディネーターであると前述した。しかし、ここ数年で経験年数の少ない先生の数が増えてきている。研究企画は、部会研究をコーディネートするだけでなく、自ら率先して研究を導いていくファシリテーターとしての役割が求められてきている。実践研究を進めていく上で、自分の経験と本校研究の間にあるギャップは大きいものである。部会研究が、これを埋めていく上で極めて重要である。ということは、研究企画に求められていることは、これまで以上に大きくなる。

そして、こうした部会研究を研究企画会の中でも議論し、よりよい部会研究について探っていく必要がある。わからないことを自由に述べ合えるという雰囲気は、研究企画会でも同じである。研究企画であるS先生にとって、研究企画会はその雰囲気が大きな刺激となり、自分の部会にも反映しようと考えたという。部会と研究企画会は、その役割は異なるとはいえ、互いに補完しあいながら、影響を与えあい、本校の研究を推進していく原動力となっていく。